



Relive Journal

りらいぶ” ジャーナル No.48

2024年 初夏号

(2024年5月31日発行)

< “りらいぶ” 憲章 >

- 組織、肩書き、経歴にとらわれない自由な生き方
- 知識、経験、技術を生かして社会に貢献する生き方
- 初心に帰って新しい自分を発見する生き方

私たちNPO法人リタイアメント情報センターはこのような生き方を
“りらいぶ” と呼び、その生き方をサポートします

<目次>

1. 中野先生からのメッセージ	(顧問 中野 寛成)	P2
2. 東京地区落語会を振り返って	(会員 島村 晴雄)	P3
3. コラム「日本人の物の考え方」	(ANA 総合研究所エッセイから転載)	P5
4. 池口美智子先生個展風景	(事務局)	P7
5. バリ島ウブドの日々① ジャシの火祭り	(会員 黒部 正也)	P9
6. バリ島ウブドの日々② 本物の魔女ランダ	(会員 黒部 正也)	P11
7. 走行中に手綱をおいて	(会員 鳥居 雄司)	P13
8. 私の記録 (20歳代前半まで) 3/3 完結編	(会員 石尾 賢一)	P15
9. 北米1 (世界1) になった途端「ジャップ!」と言われた	(会員 赤神 潔)	P18
10. 事務局からのお知らせ		P26



中野先生からのメッセージ 【お正月と門松】

(顧問 中野 寛成)

きれいに晴れた元旦、どこの家にも門松がかざられてあった昔と違って、最近ほとんど普通一般の家庭では、門松を飾らず、むしろ床の間に松竹梅を生けるようになりました。

そして門松は、神社や寺院と、お客寄せのための商店が、年末に早く立てるようになりました。

東京などでは、門松の松はほとんど見当たらずに、小さいもので、細長い竹が二階にまで届いて、竹林のようにして商店街を飾るのが最近の慣わし(ならわし)となりました。

松竹梅を文に飾るのは、それぞれ松竹梅を仏さまの教えにたとえて、今年一年の修行と信仰の誓いのために、而も一番眼につく処として門口に立てることになっている訳です。

松は慈悲の松、と言われております。年中青々と葉を繁らせて、枯れる時がない。

寒い時とか暑い時とか、気候と条件によって自分の姿を変えない。それはあたかも、私達のお行いが相手の態度によって、親切にもなり、あるいは冷たんにもなるということがない。

即ち慈悲とは常に、相手の態度如何に拘わらず、情深い変わらざる心と行いをする事の姿を松にたとえております。

竹は誠を表しております。竹を割ったような人とよく言われるように、真直ぐな性格、相手がどんな横車を押しても、自分は真直ぐに受けて立つ。相手が正しいと、正しくないかを問わず、自分は決して曲げない。真直ぐより割れようがない。そして節ある毎に伸びる。誠は時として社会に通用しない時があります。悪が栄える時もあります。然し、その時でも、きっとその節を境にして再び伸びられる。「悪は最後には亡びる」。誠は弱いようにみえても決して折れない。

梅は堪忍の梅。寒い二月の雪の中にも、美しい花を咲かせる。春の暖かい陽気にならねば殆どの花も咲かない。梅だけは、雪のちらつく中でも、美しい花を咲かせています。

寒さに堪え忍んでいる様にしか思えません。

仏さまの教えを要約しますと、慈悲、誠、堪忍の三つの教えとなります、これを三徳と言い、八万四千の教えを一番判り易く説明し、一口に表現したものが松竹梅です。

今年一年は必ず仏様の教えである慈悲、誠、堪忍を行いますという新年の誓いとして、だれもが必ず見えなくてはすまぬ場所として門口に立てたところから、お正月の門松がかざられてある訳なのです。



《事務局からのお詫び》

中野先生からメッセージをいただきましたが、発刊サイクルにより掲載時期が大変遅くなりましたこと紙面を借りまして、お詫び申し上げます。



2. 東京地区落語会を振り返って

R&I りらいぶ落語会プロジェクト (会員 島村 晴雄)

コロナ禍で休会しておりました東京地区の第7回
 “りらいぶ落語会”を久しぶりに開催しました。皆様
 からの開催へのご支援やご協力により、無事落語会を
 実施出来ましたこと紙面を借りて御礼申し上げます。
 有難うございました。
 参加者は総勢62名となり、満席の会場となりました。
 三若師匠とは今後の東京地区落語会の進め方等の意見
 交換を行うため、懇親会を開催したいと考えておりま
 す。

《落語会風景》

《落語会チラシ》

【R&I リタイアメント情報センター 竹川理事長の挨拶】



【三若さん熱演風景】





3. コラム 日本人の物の考え方 (日本人の常識は世界の非常識)

坂下 正憲
(ANA 総合研究所客員研究員)

はじめに

よく日本人はお人好しで単純で頼られやすいと言われる。これはもちろん海外の他の国々と比べての話であるが、米国、香港、欧州と16年にわたる海外生活を通して、確かに彼らは日本人に比べ、物事を合理的に考え、相手のことを考えるより自分を優先し、和を保つより、自己主張がしっかりしている傾向がある。

日本人は一般的に小さい頃から「人に迷惑を掛けてはいけない」と教えられている。そして和を乱さないように育てられ、自分より相手のことを考える習慣が付き、自己主張が下手ということになる。

そして相手も同じように思っていると考え、思いも及ばぬ事態に直面するのである。

1. 世界に稀な民族

お人好しはおもてなしにも通じるが、自己主張は控え、自分より相手を立て喜んでもらえれば幸せと考える。なぜ日本人はお人好しになったのか？ 一つには他の民族に占領されたことがない国であり、独特の文化、考え方が定着してきた歴史を共有し、同じ価値観を持ち、言葉にしなくてもわかってもらえる、相手も自分と同じように考えていると思いがちだ。

日本では謙譲は美德とされる。読んで字のごとく、へりくだって譲ることであるが、自らを低め相手を高めることで喜んでいる民族は日本人くらいなものである。海外では人に譲ろうとなんて考えていない。それより自分が勝ち取ったものを必死で守ろうとする。香港に駐在していた時に手軽な交通手段としてミニバスをよく利用していたが、現地の乗客はたいてい出入口に近い通路側から座る。そして次に乗車してきた客が来ると窓側に詰めないで、座ったまま体を振って奥に入れさせる。

「そうかこの人は次に降りるのだな」と思っていると後からはじめに乗って来た人が先に降りる。そうすると、先客はまた身を振ってその人を通過させる。なん

て思いやりのないことをするのだと思っているとみんな同じことをしている。それでわかったのは通路側の座席は自分が獲得した権利で、それを人に譲るなんて発想は彼らにないのである。何を大げさなと思われるかもしれないが、一度香港の地下鉄に乗ってみられればよい。大半の乗客がドアの所にひしめき合って出口の近くの位置を死守している。車両の真ん中はガラガラなのにドアの付近だけが異常に混んでいる様子には笑ってしまった。

これが日本ならどうだろうか。バスに乗っても次の客が来れば自分は窓側に詰めるか、あるいは次の人のためになから通路側を空けている。電車に乗っても次に乗ってくる人の為に自然と奥に詰めている。東日本大地震の時に整然と並んで救援物資を受け取っている様子に世界中から称賛の声が寄せられたことは記憶に新しい。日本人には当たり前のことであるが、これが海外ならわれ先にとトラックに乗り込んで物資を奪い合うことになるのだろうか。日本では奪い合うこともなく、仲良く分け合っている。何が違うのか。

「衣食足りて礼節を知る」とはよく言われるところであるが、概して日本人は高度な教育を受け、豊かな生活を送っている。1970年代に1億総中流という言葉が流行ったことがあるが、日本の社会においては極端に裕福な人や貧しい人が少なく、格差が小さいのである。無理して人を押しのけなくても、普通に健康で文化的な生活を営むことができる、平和で治安が良い社会が形成されたのである。こうしてお人好しで単純な性格が醸成されていったのではないだろうか？

2. すぐに信用してしまう日本人スタンダード

騙されやすいという点では、他人を簡単に信用してしまうと言い換えた方がよいかもしれない。

日本社会においては「人を見たら泥棒と思え」とも言われるが、「嘘つきは泥棒の始まり」の教えの方が浸透している。正直に目立つことなく、奥ゆかしく生きることがよいとされている。

香港に駐在しているときに親しくなった現地友人が「香港では小さいころから人を信用するな」と教えられていると教えてくれた。中国も含めて香港人は人を騙すことは悪いことだが、騙される方も悪いと考えているそうだ。



一度、香港随一の繁華街「銅鑼灣」のそごう百貨店でソニーのラジカセを買ったことがあるが、驚いたことに店員は化粧箱を開けてきれいにラップされた新品を取り出してきて、無造作にラップを剥してラジカセを取り出し、電池を装填して、試聴するように言ったのである。そして「聞こえるか?」と聞くので「聞こえる」と言うとそのまま元の箱に戻して、そのまま手渡しされたのである。折角、新品で購入したのに包装を無茶苦茶にしてどうしてくれるのかと怒りを覚えた。最初はわけがわからなかったが、購入した製品が不良品でなく、正常な状態で提供したということを店側としては示したかったということのようであった。

いくら香港とはいえ、日系の百貨店で新品の日本の電化製品を購入したのだから不良品であるわけはなく、たとえ壊れていても百貨店に持ってくれば交換してもらえるのだから、そんなことをまでしなくても普通の日本人は考える。しかし、人を信用しない香港人の立場から考えるとどうだろうか? 購入した客が家に帰り、不良品と取り換えて、新品との交換を要求してくることや、いかにソニーといえども箱に入っているものが本物かどうか保証はない。実際、(中国の)工場から出た不良品が横流しされて堂々と化粧箱に入れられて売買されるケースは枚挙に暇がない。さらに言えば、本当に不良品が入っているケースも絶対にないとは言えないのである。

そこまで考えるとあの店員の行動も理解出来るような気がする。店側は消費者を信用していないし、消費者側は店を信用していないのである。似たような経験はドイツでもあった。フランクフルトに赴任して入居した家の階段の踊り場の電球が切れたので、近くの大型家電販売店に行って同じ電球を購入して、家に帰ってつけると点灯しない。翌日、レシートと電球を持って大型家電販売店へ行くと「あなたはこれを買う前に点灯することを確認したか?」と聞く。私は若干の謝罪と新品の交換を期待していたので驚いて、「そんなことはしていない」と言うと、店員は電球売場に私を連れて行って電球が一杯乗っているワゴンの上方を指差した。そこには横一列に様々な種類のソケット(電球の差込口)が並んでいた。「えっ? これでテストして買うの?」。

これも日本で暮らしていると考えつかない。
何しろ段ボールみたいな緩衝材で包装されている

新品なのである。それをいちいち取り出して、そのソケットに差し込んでチェックする必要があるのか。あるのである。製品品質において日本と競うドイツでもこうである。

不良品が出現する確率は少ないかもしれないが、店を信用しないで自分で買うものは自分で確認することがドイツスタンダードなのである。やっと理解した私に苦笑を浮かべながら、謝罪を期待していた私は購入方法を知らなかったことを詫びて、交換してくれたことに感謝してその店を去ったのである。

3. 現金も信用してはいけない

何事にしてもあまり相手を疑わず、簡単に信用してしまう傾向にある日本人ではあるが、海外においては通用しないし、痛い目に会うことの方が多い。日本の旅行ガイドブックにも載っている香港の人気アヒル料理店があるが、そこにはコース料理の日本語メニューがあった。日本人が入店するとそのメニューが出されて注文するわけだが、その代金はコース料理を別々にアラカルトでオーダーするより高かった。日本人ならセットになっている方が安いはずと思い込んでいるので喜んで支払っている。

この事実を教えてくれたのは部下の香港人だったが、日本人は気の毒だと言っていた。お金にしてもそうだ。アメリカ人はレストランなどで支払いの時、明細書一つずつ、時間をかけて慎重にチェックする。日本人にはそういう習慣はない。そんなことをすると相手を信用していないと思われるのではないかと考えてしまう。間違っても請求してくるとは想像もしないのである。よって確認もしないで払ってしまう。言われるがままに支払ってしまう。

これが日本国内であればそれほど問題はないが、海外ではそうはいかない。実に間違いが多いのである。実際に間違えることもあるが、故意に間違えていることも多々ある。おつりもわざとごまかされた経験も何度もあった。よく海外の人は計算が苦手がよく間違えるなどと言われるが、とんでもない。実に計算高いのである。帰国しゴルフ場などでカード払いする時にフロントで係員は明細も見せずに金額だけを言ってカードを受け取ろうとするが、いつも違和感を持ってしまう。同じことをアメリカ人にすれば、びっくりされるか拒否されると思う。(回転しない) 寿司屋などでアメリカ



人は納得して料金を払っているのかと想像してしまう。

多分、日本人は一番現金を有難がっている国民ではないかと私は思っている。私もアリゾナ大学に留学するまで現金が一番だと思っていた。ところがアリゾナで生活を始めてみて、現金より小切手 (Personal Check) が信用され重用されていることに気がついた。現金は贋金を掴まされる危険があるし、持っているときと奪われる可能性だってある。強盗が狙っているのは現金であって、受取人以外には何の価値もない小切手には見向きもしない。よって安全なのである。お店にしても現金より小切手のほうが狙われない分、安全有難いのである。実際に使ってみれば小切手は本当に便利にできていて、いつ、いくら誰に払ったのか記録が残るし、紛失しても実害がないので郵送だってできる。このシステムが考え出された背景には、贋金や強盗が常態化していて、それらから身を守る必要があったのではないかと思う次第である。

香港人はたいてい高価な貴金属を身につけているが、よく聞いてみると強盗に遭った際に貴金属を差し出して命を助けてもらうとのことであった。もっとも香港人の貴金属好きは暗い歴史に根差している。イギリスの植民地時代、日本軍に占領されていた時代、戦後の中国共産党と国民党の内戦時代、文化大革命や天安門事件の大混乱時代を経験してきた香港人は政府や自国通貨を信用していないのでお金を持てばどんどん金に交換する。そして街に銀行ならぬ金行が蔓延することになるのである。

日本では、今使っている紙幣が一晩にして紙くずになってしまうとか思いつかない。実際に偽札を見た人もほとんどいないだろうし、ホールドアップにあった人もまれである。町で落とした財布が、そのまま交番に届けられ手元に戻ってくるような国である。国家を信頼しているというより疑ったことなど一度もない。そういう民族なのである。

《おわりに》

お人好しで単純で翻されやすいと最初に言ったが、言い換えれば常に周りに気配りし、素直で、嘘をつかず、真面目で、控えめで和を貴ぶ世界にもまれな素晴らしい民族ということになる。私は日本人の考え方が間違っているとか良くないと言っているわけではない。自分たちの良いところをしっかりと認識し、他の国々の

人達とは考え方が違うという事を理解して欲しいのである。

繰り返しになるが、日本人は概して海外の人も日本人が考えるように考えると思いがちである。日本人の考え方こそが世界で特異であることを理解したうえで、海外の人とつき合って欲しいと願う次第である。最後にある外国人が日本を観光して一番の魅力は日本人だと褒めてくれたことをつけ加えておく。

＜本コラムはANA 総合研究所 レポートからの転載としています。＞



4. 池口美智子先生個展風景

於：東京 日比谷ギャラリー

(事務局)

過日(5月20日)竹川理事長と事務局担当が池口先生の個展を鑑賞させて頂きました。

その際に先生にお時間をいただき、インタビューさせて頂きました。

どれも素晴らしい作品ばかりでしたが、先生の作品は和紙に毛筆で制作されていて、額も絵画にマッチしたオリジナルな額を制作されているとの事でした。

大変素晴らしい作品を拝見させて頂き、有難う御座いました。益々のご活躍とご発展を祈念致します。



《池口 美智子先生 略歴》

(大阪府豊中市出身)

- 1962年~1993年・・・私塾に在籍 (画号・奉道)
阪急百貨店梅田本店などグループ展多数
- 1987年~2010年・・・個展約50回
 - ・大阪・兵庫 川西市立ギャラリー(5回)、池田市立ギャラリー(5回)
リーガロイヤルギャラリー(大阪リーガロイヤルホテル)(15回) など
 - ・東京銀座 朝日ギャラリー(有楽町マリオン) など
 - ・岡山 天満屋岡山店美術ギャラリー
- 2001年~2005年・・・パリ展覧会
- 2001年 パリ・グループ展 Saint Charles de Rose
- 2002年 パリ個展 Atelier Visconti
(パリ・サンジェルマン・デ・プレ)
- 2005年 パリ個展 Atelier Visconte
(パリ・サンジェルマン・デ・プレ)
- 2005年 ル・サロン (パリ) 人選
- 2011年 hillp James 校/大阪、ギャラリー日比谷/東京
Café&Gallery ゆめや/神戸
- 2012年 リーガロイヤルギャラリー
- 2013年 ギャラリー日比谷 /東京
- 2014年 ギャラリー御堂筋 /大阪



NPO 法人
リタイアメント情報センター
Retirement & Information Center



- 2015 年 ギャラリー日比谷 /東京
- 2016 年 ギャラリー香 /大阪
- 2017 年 イタリア文化会館 /大阪
紀伊国屋書店 梅田本店 /大阪
- 2019 年 ギャラリー日比谷 /東京
- 2021 年 ビアスギャラリー /大阪
- 2022 年 ギャラリー日比谷 /東京
- 2023 年 ギャラリー日比谷 /東京 5月、
- 2023 年 ビアスギャラリー /大阪 11 月
- 2024 年 日比谷ギャラリー /東京 5月
- 2024 年 ビアスギャラリー /大阪 11 月予定
- 〔その他〕 (元) 水墨画講師

- 朝日カルチャーセンター (東京・立川)
- 毎日文化センター (大阪・梅田)
- 兵庫県警
- 企業美術部 等



フィレンツェにて



5. バリ島ウブドの日々① ジャシの火祭り “Prisoner of the charm of Bali” (会員 黒部 正也)

「ジャシ村の奇祭を見に行きませんか？」
と、隣室のN芸大の山川先生に誘われた。2000年、
会社定年退職を機に、予てから憧れていたバリ島芸術
村ウブドで絵画技法を学びながら民宿暮らしを始めた。
その4年目、2003年4月1日の朝のことである。

バリ島東北部の鄙びたリゾート、チャンディダサの
定宿イダホームステイで一週間過ごした後、中部バリの
ウブドの定宿、グヌン・クニンへ移った。この宿のオー
ナー、イダさんは若い頃サヌールの大手ホテルに勤
務し、日本語は堪能である。人柄と過不足ないサービス
に定評があり、日本人のリピーターが多い。
山川先生は、毎年学生数名を連れて、バリ島の芸能を見
学させている。今回は男女四名計八名の学生を連れて
きた。前年、私が学生用に風邪薬を差し上げてから更に
親しくなった。

民宿のオーナー、イダさんが用意した小型バスでジャ
シ村へ向かった。バリ島の東海岸に沿って幹線道路
を二時間走った。チャンディダサを過ぎ、バリ島最東部
県庁所在アムラプラへ向かう道路の途中で停まった。
中年のお祭り衣装を着た女性がにこやかに私たち一行
を迎えてくれた。

「以前私の民宿で働いていたワヤンさんです」
と、イダさんが紹介した。

彼女は一行を寺院の正面の道路に面した大きな家の
軒先の席に案内した。言わば特等席を用意してくれて
いた。村人およそ1000人位が軒先の客席から舞台の
道路を眺めている。
午後七時、夕日が沈み、辺りは急に暗くなってきた。黒
装束の係員が、寺院の前の幹線道路の上下を遮断した。
アムラプラ側を上手に、下手のチャンディダサ側
100メートルが火祭りの舞台らしい。

前触れもなく、下手から白いお祭り衣装の村人数人
が現れ、横一列に並んで、すり足で、足早に寺院の割れ
門へ、まるで吸い込まれるように入っていく。間隔は

当初は100メートル。7時20分になると、間隔は30メ
ートルに縮まり、人数が増える。真っ白いお祭り衣装の村人が
300人位寺院に入り、門が閉じられ、境内の灯りが消
えた。「無言劇の一種ですね！」と、山川先生が身を乗
り出して見入った。
7時半、寺院の門が開いて、暗闇の寺院の奥から村人が
一斉に吐き出されるように道路側へ現れた。山側の上
手と海側の下手の二つのグループに分かれ、それぞれ
が道路に蹲った。

街灯が消えた。星明りだけでは何も見えない。暗闇の
道路から「パシャ、パシャ！」と、木の葉を地面にたた
きつけるような音がした。私は目を凝らしてみたが何
も見えない。

八時になった。上手の村人の手元にそれぞれ明かりが
灯った。上手の村人が手にした松明に火を付けたのだ。
松明が一斉に下手の村人の席へ投げ込まれた。それが
闘い開始の合図だった。下手から火の付いた松明が上
手の村人席へ投げ込まれた。凄まじい火の手が上手と
下手を行交った。ジャシの星空が松明の火の玉で真っ
赤に染まった。観客の村人が大声で応援する。

「キャー」と、悲鳴があがった。私の目の前に燃え盛
った松明が落ちた。長さ60センチ、太さ7、8センチ。
先端に椰子の枯れ葉が束ねて括られ、それが燃えてい
る。投げ込まれた松明を瞬時に投げ返すのが火祭り合
戦の妙技らしい。

上手と下手が火の付いた松明を投げ合い、陣地の取
り合いをしている。綱引き合戦の要領だ。松明の火が消
えかかるとそれが一回戦終了の合図らしい。黒装束の
大柄な男が双方の陣地の真ん中に突っ立った。上手に
歓声が沸く。上手の陣地がわずかに広がっていた。陣地
の取り合い合戦が三回続いた。

上手の陣地に歓声が広がった。山側が勝った。黒い
制服を着た世話役の合図で、街の街灯が灯り、道路の封
鎖が解かれた。道路閉鎖で約二時間、待ちかねた大型ト
ラック、観光バスなどが一斉に走り出した。二年に一回
の奇祭は終わった。

「クロベサン！」と、白い祭り装束の若者に呼び止めら
れた。白い装束は松明の煙で真っ黒に汚れている。顔も
煤で見分けがつかない。私が訝っていると、「スタッフ
のアグスですよ！」と案内役のワヤンさんが笑って紹
介した。



ウブドの民宿で、毎朝食事の世話をしてくれるスタッフの青年だ。明日はニュピ。バリ島の言わば正月。彼は休暇で、里へ帰っていたのだ。

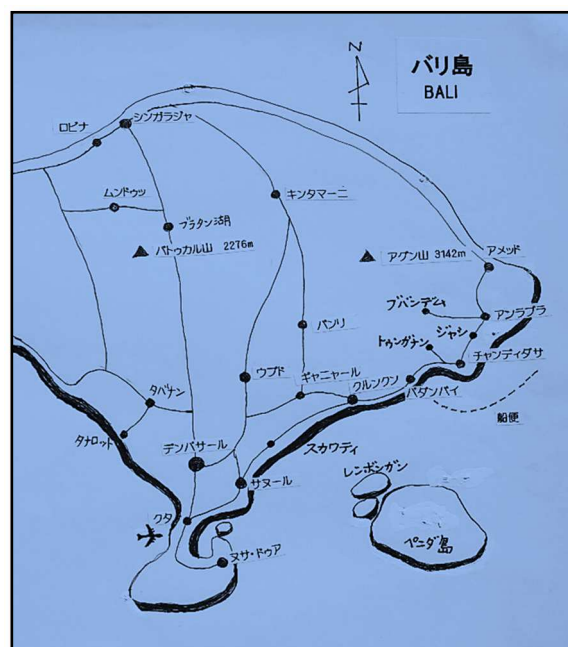
彼の周りに、山川先生や学生が取り巻いた。火祭りのパフォーマンスに質問が相次いだ。「松明の投げ方を見せてください！」と、女子学生のひとりがアグスさんに頼んだ。

アグスは道路の脇に胡坐をかいて座り、瞑想した。突然立ち上がり、中腰になった。敵陣へ松明を投げ込むポーズをした。煤で真っ黒になったアグスの眼が開いた。真剣で異様な目付きが見る者を圧倒した。一行から拍手が沸いた。小柄なアグスが大きく見えた。その夜、私は序破急がくっきり、はっきりしたジャシの火祭り見物の余韻からか、なかなか眠れなかった。

<松明が飛び交う火祭り>



<道路が舞台、軒先が観客席となる>





6. バリ島ウブドの日々② 本物の魔女ランダ “Prisoner of the charm of Bali”

(会員 黒部 正也)

「ブラ・ダラムでオダランがありますよ！」
と、民宿のオーナー、イダさんが私に耳打ちをしてくれた。2005年4月3日(日)の朝のことである。
オダランとは寺院の祭礼で、神への奉納劇が催される。
厳粛な儀式でカメラは禁止という。
私は2000年の会社定年退職を機にバリ島で民宿暮らしを始めた。定宿のオーナー、イダさんは以前村長をしたことがある地元の名士で、村の催し物の情報に詳しい。

予てから観光用でない本物の「パロン・ランダ劇」を見たいと思った。その昔、ウブドに住みついたドイツ人画家、シュピースは、演ずる男たち全員がトランス状態に陥るほどの、神がかりの演劇に興奮したと著書に記載されている。イダさんにオダラン情報をお願いしてあった。

夕刻六時、私は早速バリ島のお祭り衣装に着替えた。ウダン(頭に巻く布の帽子)とサファリ(上着)は白、サブッ(腰の巻いたサロンの上に巻く布)は金色か黄色。私のサブッは金色。
プリアタン村の奉納劇は、何と道路を遮断して行う大掛かりなものだ。遮断した道路を舞台として、お寺の境内は即席の観客席となる。

舞台の周囲に竹竿を立てて、配線しマイクが数本吊り下げられた。舞台の上手に名門、グヌン・サリ劇団のガムラン音楽隊が座り、マンダラ家の当主バグースさんが胡弓を弾いている。
六時半、ペンデット(歓迎の踊り)が始まった。四人の美女が手に花籠を持ち優雅に舞い、最後に神々と観客へ手にした花を投げ祝福をした。

道化師や仮面の踊り手が次々と踊りを披露して、会場の雰囲気盛り上げていく。舞台を囲んだ村人は約千人。全員お祭り衣装で着飾っている。観光客はほとんど見当たらない。

始まって一時間たった。突然黒服の世話役が、観客席を整理して花道をつくった。灯りが消された。真っ赤なスポットライトに照らし出されたのは、魔女ランダだ。

強力な呪力に畏れる観客は一斉にどよめいた。
舞台上上がったランダは、髪の毛を振り乱し、若い剣士(クリス)八名と闘いを始めた。ガムラン音楽の金属音が高鳴り、赤いライトが激しく点滅する。ランダが唸り、若者たちは必死の掛け声を発しながら立ち向かう。観客は総立ちになって、ランダとクリスの戦いに見入った。

20分続いた闘いの結果、ランダの呪いの言葉でクリス達はトランス状態になった。自他の区別が出来なくなったクリスは自分の胸に剣を刺し始めた。パロン・ランダ劇の見せ場だ。
聖水の壺を持った僧侶や村人数名が、一斉に舞台へ上がって狂ったクリスをなだめた。ところが、ランダの呪いは強烈だ。奇声を発しながらクリスは舞台を駆け回る。中にはガムラン隊の中へ倒れこむ者もいる。

舞台も観客席も騒然たる雰囲気包まれ、村人は大勢舞台へなだれ込んで、ランダとクリスを抑え込んだ。明かりが灯り、ガムラン音楽が止んでも、クリスを演じた若者たちのトランス状態は戻らない。私は演技と思ったが、そうではないらしい。
クリスを演じた若者達は次々と舞台から担ぎ出された。「肩を貸して！」と、村人がトランス状態を見入っていた私に声をかけてきた。最後まで舞台に残された若者を私は村人と一緒になって担ぎ出した。

村人の指示に従って、寺院の奥殿まで運んだ。上半身裸の青年の身体は重く肩にのしかかり、身体は汗と油でぬるぬるしている。若者の熱い背中に時々痙攣が走る。足を痛めたらしく足元はふらついている。吐く息は荒く、眼はうつろで、トランス状態が続いている。私は村人と懸命に若者を支えながら必死になって奥殿へ運び込んだ。

奥殿の社の前に、クリスを演じた若者八人が横並びに崩れるように蹲った。白い衣をまとった僧侶が香を焚き、若者たちの頭上に聖水を振りかけながらお祈りの言葉を続けた。「コマン、コマン、大丈夫なの？」と、母親が若者に小声で呼び掛けたが、返事は無い。僧侶が聖水を二度、三度と振り掛けているうちに、目元が



しっかりしてきた。僧侶に促されて、家族と共にそれぞ
れ出てゆく。私は母親に聞いた。
「何歳ですか?」「17歳です」

かって、ドイツ人画家、シュピースが見た同じトラン
ス状態を私もついに見た、本物の奉納劇を見たとき興奮
が治まらない。異常な興奮を反芻しながら、オレンジ色
の淡い街灯に照らし出されたロータリーを左へ折れて
緩やかな坂道を民宿へと歩んだ。玄関口にいたイダさ
んに私は興奮しながら「剣士が全員眼を回して倒れま
したよ!」と言うと、イダさんは「クラウハンですね」
と、事も無げに言った。クラウハンはバリ語で神様が降
りてくることを意味するという。私はその夜、明け方近
くまで、興奮して寝付けなかった。

＜魔女ランダの咆哮 水彩26×26＞



＜咆哮に狂った剣士(クリス) 水彩34×26＞





7. 走行距離 60km に

(会員 鳥居 雄司)

昔の記憶だと

北海道で8月開催の大会に出場するのは今回が最後になります。エンデュランス競技は走行距離、走行時間もながく、馬に大きな負担がかかります。北海道の夏は気温が多少あがっても、湿度の低さからエアコンは不要と言われていました。私が社会人になりたての頃、ほぼ50年前ですが、お盆に阿寒湖のほとりで盆踊りをしたことがありました。浴衣で曲にあわせてグルグル回りながら踊ります。真夏と言っても寒さを感じ、準備された焚火に集まって暖を取った記憶が鮮明に残っています。ところが、最近の北海道はかつて不要と言われていたエアコンだらけです。馬に大きな負担になるエンデュランスなので、いつも馬をお借りしている馬主さんはこの大会(2020年)以降、8月は大会参加を止めるそうです。



走行距離 60km に参加

気温 20 度、小雨の大会になりました。前日の下見では空は青く澄み渡り、強い日光に飼料用のトウモロコシが実っていました。大会参加者に水分補給、試合運びなど十分な準備を求められます。走行中は風をうけるので、涼しそうな印象がありますが実際は考える以上に汗をかいています。

日頃の 45 分間の乗馬練習で常歩(なみあし)、速歩(はやあし)とわずかな駈歩(かけあし)をするだけで汗をかきます。真冬 2 月の練習でも快適な上半身の服

装は、汗を吸収しない蒸発しやすい登山用の化学繊維でできた多少厚手のシャツ、落馬の衝撃を緩和するベスト型のエアバッグ、以上です。気温は 10~14 度が乗馬をしていて最も快適です。気温 20 度は人も馬も水分補給に要注意です。今回は小雨なので日差しによる気温上昇を考えず、雨で人も馬も体温上昇を防げそうです。

申し込んだ 60km の参加者は

7 名が 60km に参加しました。私と同じ馬主さんから 3 名、全日本大会で優勝して、秋の全日本大会に出場予定の選手を含む 3 名、この大会で会場を提供している牧場から 1 名の内訳でした。私たち 3 名は制限時間内に到着し、獣医検査を無事通過する完走を目指しています。それで、会場を提供している牧場からの参加者について走り始め、馬の動きを整えながら進むことにしました。

1 区間のコースは川沿いをのぼり、対岸に渡って川沿いをくだります。途中できつい登りを区間最高地点まで行き、急な下りを川岸まで戻り、川沿いを進んで折り返しから出発点に戻ります。高低差はありますが川沿い、川渡り、木立の急な登り、高原の開けた景色の走破、砂利道の下りなど変化に富んだコースです。

会場を出られない

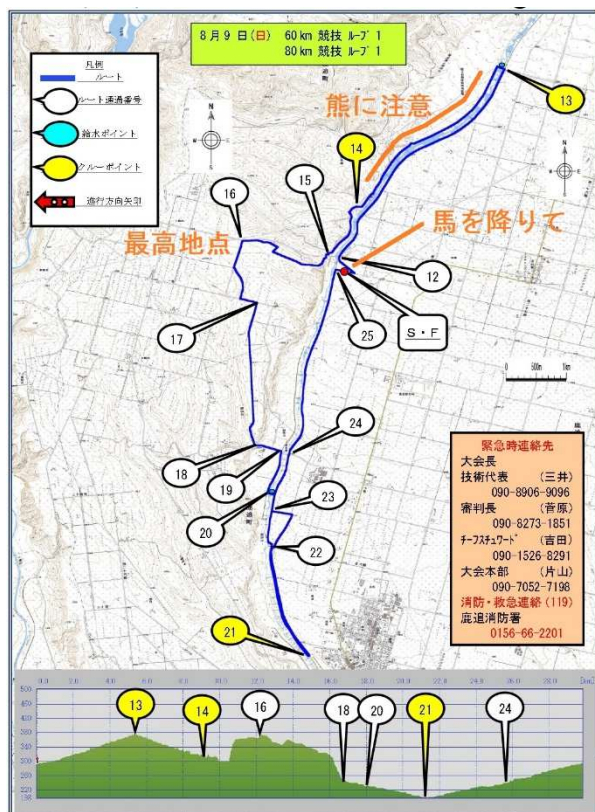
6 時 30 分に出発して牧場出口へ向かいます。出口付近は馬の放牧、二フトリ小屋、つながれたヤギ、ウサギ小屋など多くの動物が飼われています。この牧場から参加した馬には見慣れた景色ですが、私達の馬にとっては異様な景色に見えるようで、動かずに止まってしまいました。後ろについて走ろうと考えていた選手に取り残され、馬を整える当初の計画は崩れるし、余分な時間経過は後の走行に響いて完走の妨げになるし、不安になります。日頃の乗馬練習では拍車で蹴ったり、鞭でたたいたりしますが、エンデュランスは拍車、鞭の所持は禁止です。拍車のないブーツで蹴ったり、手で馬の尻をたたいたり、脚で馬の腹を圧迫しますが馬は動こうとしません。馬は見慣れないものは危険なものと考えらしく、危険と判断するとひたすら逃げて距離を置こうとします。いつものクラブで練習をしているときに、風で流されてきたレジ袋を見るなり、一瞬で 180 度反転して逃げの態勢になるのを見ました。あまりに見事な半回転で乗り手は落馬することなく馬と一緒に回転してポカンとしていました。回転ではなく横跳びで逃げようとすると、馬の動きから取り残され



で落馬することが多いです。

5分ほど無駄な努力をしましたが、実ることはなく最後の手段で三人の内で最も若い高校生が馬を降りて手綱を引いて馬を動かし、残る二人がそのあとをついて牧場を出ました。

道、ぬかるみなど足場が悪いときは前脚でしっかり路面をつかめずに滑ったりバランスを崩したりすることが多くなります。乗り手が下馬して馬を引くのは下り坂が多くなります。先行者は速度を落とさず下るので私たちは安全を考えてゆっくり無理なく降りることにしました。



熊注意の場所

先を行く馬に追いつこうと13番の折り返しから川の対岸を14番に向けて走ります。主催者のコース説明で、熊の出没を告げられました。注意をするといっても、騎乗している選手より走っている馬の方が視野は広く、嗅覚も鋭いので、人より先に熊の気配を感じます。少しでも感じると身を守る本能から馬は安全と思われる方へ目散に走り、そうすると制御不能になり、落馬しないことを最優先にします。落馬して熊に襲われたくありません。それで、熊注意の場所では、遠くから人の通過を知らせて、熊が近寄らないように仕向けるために、笛を吹きながら通過します。笛を口にくわえて断続的にならすのは結構な肺活量を求められます。緊張感も手伝って走行速度が増して、16番の最高地点で先行した選手に追いつくことができました。

坂の上りと下りを比べると、下りの方が馬に負担がかかります。それで下りは速度をやや落とします。砂利

ゴール近くで

1区間の後半になると疲れがでてきて集中力が欠けてきます。このとき、牧場の出口で下馬して馬を引いた高校生が「1区間ゴールまで残り5km」と声をあげました。コースの途中で目安になる距離の表示はありますが、彼は腕時計型の走行距離計の数字を伝えてくれました。走行距離計は衛星から自分の位置(緯度、経度)を頻繁に受けとり、時計の位置変化から走行距離を表示します。スマートフォンのGPS活用の登山用アプリも同じように使えます。

残り5kmの声で疲労が減少した感じがして3頭ともに無事に到着することができました。この区間は距離30kmを3時間で走破する予定でした。出発直後のもたつき、急な下り坂をゆっくり下る等ありましたが、2時間29分で走破し、3人とも獣医検査に合格して2区間へ進むことができました。

ベスコン?

エンデュランスは走行時間を競う個人競技です。時に互いに助け合う必要に迫られることもあります。他の参加者のためにかった時間を自分の走行時間から省くことはありません。出発から到着まで、馬の状態を良好に保ちながら走り切ります。参加者の順位は、完走した走行時間の少なさで決まります。その他に成績上位者の中から騎乗馬の獣医検査結果が最良だった参加者に「Best condition (ベスコン) 賞」が贈られます。この賞の受賞者が最も称賛されることがエンデュランス競技の魅力の一つです。



8. 私の記録 (完結号) 3/3

(会員 石尾 賢一)

父のエピソード

わたしの父方の祖父母は石川県羽咋の出身である。祖父の家系は羽咋郡志雄町にて代々石尾武兵衛、祖母はその隣の羽咋郡南邑村字杉野谷にて金曾仁左衛門を名乗っていた。祖母は三男五女の兄弟姉妹があり長女(明治7年生)と五女(明治33年生)であった祖母はなんと26歳と親子ほど年齢が離れていた。父は大正8年生まれ、昭和2年祖父が早逝したため祖母の手で養育された。昭和15年1月21歳で応召され内蒙派遣人見部隊中隊隊に加わった。内蒙に赴くも病を得て除隊され内地に帰った。その後病を治して結婚した。昭和19年に一児を設けたが父は再び応召されて大陸に渡った。その稚児(わたしの兄)は昭和21年1月、二歳の春を前にして没した。その頃父は中国本土にて復員を待っていたので長男が亡くなったことは知らなかった。

◇復員

20年8月15日終戦により日本軍は武装解除された。父の部隊は9月21日まで揚子江中流の要塞であった蕪春の対岸の李家洲に駐屯していたらしい。その李家洲から撤収がはじまり翌年昭和21年6月末に我が家に帰りつくまでの父の記録が残っている。神戸淡路大震災で実家が被災した際の混乱で多くを失ってしまったが、私の生まれる前の父の手書き文書としては唯一ともいえるこの復員日記だけは大切に残っていた。



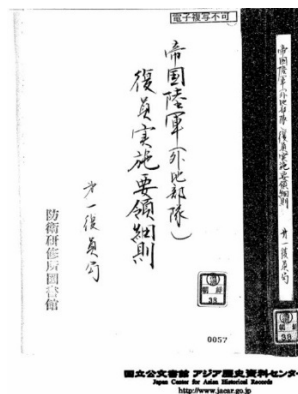
父は昭和15年1月21歳で応召され内蒙派遣人見部隊中隊隊に加わった。この後病気治療で除隊されて日本に帰りふたたび中国に渡った。その後終戦までの駐屯先は内蒙古で

はなく揚子江沿岸の地であったようだ。

父は生前戦争中のことはほとんど話をしたことがない。これはビルマ方面に駐屯していた家内の父もそうであって、戦争中の外地での体験は深くトラウマとなっていて家族にも話したくなかったと思う。

今般、父の復員記録を紹介するに当たり、国立公文書館に残された中国本土から日本への復員の記録を調べてみた。

復員は昭和20年9月6日支那派遣軍総司令官岡村寧次大将、支那方面艦隊司令長官福田良三中将が南京にて中国陸軍総司令官との間で降伏文書に調印後、支那派遣軍総司令官より9月9日「支那派遣軍復員規定」が通達され、翌日「帝国陸軍(外地部隊)復員実施要領細則」が発表されたことによりはじまった。



父の記録によると9月9日に通達された「支那派遣軍復員規定」により9月21日に部隊が駐屯していた李家洲より復員がはじまった。

昭和20年10月2日より翌昭和21年5月25日まで馬当露営地に留まったあと南京から鉄道で6月15日に上海に出た。6月15日引き上げ船にて上海を出航し6月21日浦賀に着いた。そこで検疫待機し27日に日本に上陸した。久里浜より列車を乗り継いで6月30日十三の我が家に到着した。この時期4月05日に広東より浦賀港の引揚船にコレラ発生、6月4日まで海上隔離されたという。たぶんその影響で検疫が強化され21日から27日まで浦賀沖に留まったのであろう。

揚子江の戦い

揚子江沿岸は蒋介石ひきいる国民党軍と日本軍の戦場であった。父の記録に記されている揚子江沿岸での日本軍の戦いについて調べてみた。揚子江を漢口から上海まで砲艦と呼ぶ浅瀬の多い川底に対応した船幅が広く船底が浅い200t～1000tの艦船を「砲艦」と称して哨戒と補給に当たらせていた。これらの艦艇は19隻あって「鳥羽」、「嵯峨」、「橋立」、「宇治」、「勢多」、「堅田」、「比良」、「保津」、「熱海」、「二見」、



「伏見」、「隅田」、「多多良」、「須磨」、「唐津」、「舞子」、「鳴海」と白砂と松並木が眼に浮かぶ日本の風光明媚な河岸や海岸に因んだ名がつけられていた。

艦艇の運用記録によると日本軍による南京城への入城式（1937年12月17日）以来、これらの艦艇はほとんど上海と漢口の間の哨戒と補給を専らとし、戦闘は記録されていない。米軍機が飛来して戦闘がはじまったのは昭和19年6月であった。

艦名 比良 基準排水量 305 t

T10.08.15：起工：三菱造船株式会社神戸造船所で仮組立。
解体、漢口へ輸送 T11.04.17：起工：揚子機器廠で本組立
T12.03.24：進水

19.06.02：1115 P38 8機と交戦

19.11.25：1406 P-51 2機と交戦、爆弾2発が後部に命中、後部弾庫爆発 1417 頃 総員退去下令、船体横倒し
1421 頃 沈没

◇根本中将と蒋介石

終戦後満州ではロシア軍の捕虜となった多くの日本兵はシベリアに抑留され塗炭の苦しみを味わうことになる。これに対して終戦後も武装放棄せず、内蒙古に攻めてきたソ連軍を撃退して軍民の安全な撤収を指揮した将軍（根本博中将）の存在を忘れてはならない。この終戦後の撤収が満州の如くであったなら、ソ連軍の侵入をゆるし満州のような悲劇が生じていたことであろう。根本博中将は1946年（昭和21年）8月、根本は最高責任者として、在留日本人の内地帰還と北支那方面の35万将兵の復員を終わらせ、最後の船で帰国した。1887年生まれ、蒋介石は1907年に日本に渡って軍事の教育と兵營の実習を納め1912年辛亥革命による中華民国建国では日本と大陸を往復して孫文を助けた。その後蒋介石は日中戦争から1945年までは日本軍と戦うこととなった。8月15日に行なった終戦演説で対日抗戦に勝利したことを宣言した一方で次のように国民に訴えた

わが中国の同胞は、『旧悪を念（おも）わず』と『人に善を為す』ということがわが民族伝統の高く貴い徳性であることを知らなければなりません。（中略）かつての敵が行なった暴行に対して暴行をもって答え、これまでの彼らの優越感に対して奴隸的屈辱をもって答えるなら、仇討ちは、仇討ちを呼び、永遠に終ることはありません。これはわれわれの仁義の戦いの目的とするところでは、けっしてありません。これはわれわれ軍民同胞一人一人が、今日にあってとくに留意すべきことです。

艦名 多々良 基準排水量 370t

T15.10.17：起工 02.05.28：進水、命名：“Guam”（PG-43） 02.12.28：竣工

03.06.15：Hull No.変更：PR-3 16.01.23：改名：Wake
16.12.08：捕獲：N-E 16.12.15：命名：達第387号：「多多良」（タタラ）

19.06.03：0028 対空戦闘：B-24 と交戦、十三耗機銃357、七耗七機銃563 発発射

19.06.15：2343 敵機 1機と交戦 19.06.16：0521 B24 1機と交戦

19.06.16：南京～06.16 蕪湖 06.17～06.17 安慶

19.06.18：1255 対空戦闘：P38 12機と交戦、十三耗機銃3,500、七耗七機銃3,200 発発射

20.08.15：内令第736号：砲艦隊編制廃止

艦船の運用記録を読んでいると機銃の発射数が細かに記録されている。戦闘の状況と補給やりくりを偲ぶことができる。父の復員折、南京まではこれらの砲艦のうち生き残った船が利用されたのであろうか。

根本博中将は8月15日の蒋介石の宣言に深く感銘を受けた。また蒋介石は根本博中将が日本軍の撤退時に示した思慮と指導力をよく理解していた。1949年10月、中国人民解放軍が金門島等へ大挙侵攻を図った際は、旧日本軍の根本博中将らが日本を密航して台湾に渡り国府軍を作戰指導し、人民解放軍を完膚なきまでに撃破した。

戦前日本の大学で学んだ蒋介石將軍は日本人の復員に大きな助力をいただいた。それにつづく李登輝総統は台湾の独立に貢献されあわせて日本と友誼を結ばれたことに深く思いを寄せ、忘れないために一文とさせていだいた。

新淀川生まれ育った実家は大阪市淀川区十三にあり、新淀川が近く、子供のころは堤防や河原へ行ってよく遊んだ。新淀川は実家に近い十三大橋、阪急線橋梁から上流へ歩くと”南方”あたりで橋桁だけ新淀川を横切った未成橋があった。この橋桁は改良されて1970年大阪万博の前年に開通して道路と大阪市営地下鉄とが共用する新御堂筋となった。当時は橋桁だけの新御堂筋の上流に国鉄（現JR）東海道線橋梁がありさらに上流に長良橋、阪急千里線橋梁とつづき、長良堰で堰き止め

られていた。淀川は長良の堰と毛馬閘門で新淀川と大川の二
手にわけられて大阪湾に流れ下っている。

長良堰より下流を新淀川と呼び、大阪湾の潮の影響を受けて上流から流れる真水と大阪湾から上がってくる海水が混じる汽水域となっている。新淀川河岸は葦に覆われていて、干満の差が結構おおしく、干潮では水が引いて群生する葦原の切れたところに砂と泥のまじったぬかるみが現れた。そこではシジミがたくさん採れて、このシジミは大層おいしく一度シジミ採りに行けば一週間くらいは朝の味噌汁の具になった。

◇河内湯

今から2000年前には大阪湾は現在より水位が高く、内陸に入り込んで大阪城のある上町台地と生駒山の間が河内潟となっていた。新淀川の干満差は子供の頃より実感していたが、神武天皇の頃にはこの干満を利用して生駒山のふもとまで船で進むことができた。近年そのことを、建築家で評論家の長浜浩明氏は当時のお阪湾の潮位、干満による河内潟への流れ込み、淀川水系からの流出を検討して『古事記』、『日本書紀』に書か

れた神武東征の時期を特定されている。古事記・日本書紀に記された「神武天皇東征語話」は太平洋戦争後JHQの焚書指令により、学校では学習することがなかった。しかしながら最近、自然科学領域の進展により『古事記』『日本書紀』の記述が裏付けされるようになってきた。

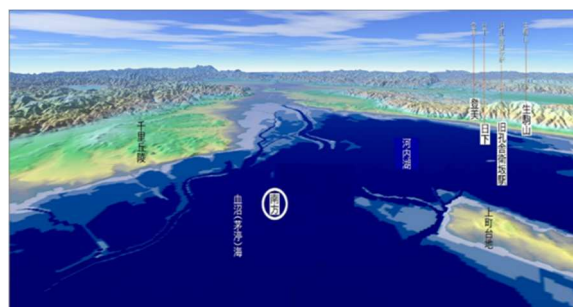
後に神武天皇となる一行が、十三の実家の傍を潮に乗って遡っていったという「神武天皇東征説話」は、わたし自身の体感として受け入れることができ、自然科学の観点からも妥当であるとの見解を踏まえて一文に記した。

◇（参考）『古事記』、『日本書紀』の神武東征説話

『日本書紀』によると船に乗って瀬戸内海を進軍してきた神武軍は“難波之碇”に至って流れが急(奔潮太急)であったのでここを浪速國となづけた。とあり、潮に乗って遡上し河内國草香邑(現東大阪市日下)に至ったと記されています。

『古事記』では生駒山の麓、孔舎衛坂の戦いで神武の兄五瀬命が、流れ矢に当たって負傷し、南方”を通って退却し、手に着いた血を洗ったのでここを”血沼

海（茅渟の海）“と名付けたとある。



完

日本書紀の記述

古事記の記述

戰。	我	長	不	甲	至	與	浪	接	戊			到	題	向	美	是	故	以	屑	從
有	國	髓	得	辰	河	許	速	。	午			血	而	日	毘	是	號	音	津	其
流	一	彥	並	、	內	泰	國	方	年			沼	、	而	古	、	其	興	。	國
失、	則	聞	行	皇	國	磨	、	到	春			海、	青	戰	之	地	地	軍	此	上
中	盡	之	乃	師	草	虛	亦	難	二			洗	負	不	痛	謂	待	時、	行	
五	起	日	還	勒	香	。	日	波	月			其	日	良	矢	桶	向	、	之	
涵	屬	一	更	兵、	邑	三	浪	、	丁			御	以	故、	申。	津、	以	登	時、	
命	、	天	欲	步	青	月	花、	會	西			手	擊	故、	於	、	戰、	美	能	、
歎	微	神	東	趣	雲	丁	、	有	朔			之	一	負	今	爾	、	那	經	
歷。	之	等	踰	龍	白	卯	今	奔	丁			血、	期	賤	取	所	買	浪	速	
	於	所	膽	田。	屑	明	謂	潮	未、			故	而、	奴	人	須	泥	渡	而、	
	孔	以	山	而	之	丙	難	大	皇			謂	自	之	吾	云	日	占	泊	
	舍	來	而	其	夏	子	波	急	師			血	南	手。	者	日	之	自	青	
	畫	者、	入	路	四	遇	說	。	達			沼	方	。	爲	下	登	下	雲	
	坂、	必	中	狹	月	流	。	因	東、			海	魁	自	日	御	下	九	之	
	與	將	洲。	險	丙	而	說、	以	船			也。	幸	今	神	手	立	字	自	
	之	奪	時	人	申	上、	此	名	輪				之	行	子	負	而		之	
	會	奪			明	徑	云	爲	相				時、		登	登	下		自	



9. 北米 1 (世界1) に成った途端 「ジャップ!」と言われた(1980) ・・・NO47からの続編 (会員 赤神 潔)

1980 年の夏、我々は新しい毛皮の乾燥装置を採用することにした。毎晩、夜遅く迄かかって、毛皮を乾かす設備を、当時、使用していない使用人用のモバイル・ホーム(移動可能な住宅)の中に作った。モバイル・ホームは約 14mx4m の小さいもので1975 年に中古のものを 5000 ドルで買い、我々4 人が1年程住んだものである。その中身の我々のベッドや子供達のバンクベッド、応接セット、トイレ、風呂、流し、クロゼット等を取り外し、片側の壁の20センチ前に厚さ約2cmのベニヤ板の壁を新たに作り、それに穴を何千と開け、プラスチックのノズルを接着剤付けし、その2 重の壁の中に3 台の 3/4HPの送風機を使って、室温の空気を送ると、ノズルから毛皮乾燥板の上の毛皮の中へ風が送られる次第だ。

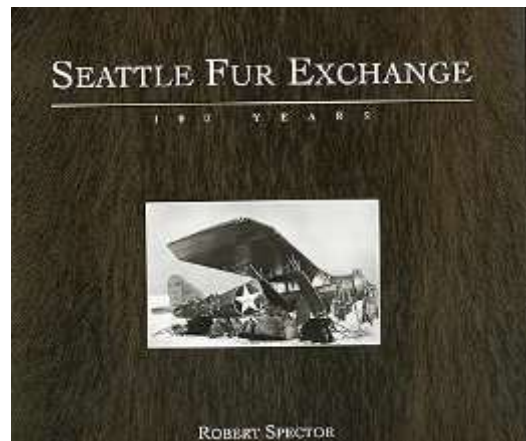
全室温はモバイルホーム備え付けの石油ファーン(床下セントラル送風暖房機)で自在に調節が出来き、確か、除湿機を1 台あれこれ吟味したのを覚えている。これで毛皮の剥皮から乾燥まで人に頼まなくても、全部自分たちで行うことが出来るようになった。

スペース農場から再度デミバフのメス 500 頭購入1980 年の全数 13667 頭の内 8717 枚出荷。しかし、剥皮乾燥作業は実に長かった。1日 20 時間程働いて4 時間位の睡眠時間が11月の終わりから次の年2 月の始めまで続いた。段々頭が疲れて来て、体は機能していたが、頭のどこかが半分位いつも寝ているようで、躓いたり、突然、転んだり、足首を挫いたりしながら、それでもやっときれいに剥皮乾燥作業をやり遂げ、オークションにどうにか間に合った。

ある日、作業室の入り口の踏み石を踏み外した時、右足外側面から着地して、右足首から大きな割れるような音がしたことがある。毎日、1日中コマネズミのように走り回っていたので、瞬間よろめいたがそのまま我慢出来て働き続けた。疲労困憊が続くと、恥ずかしくて、書くのを躊躇するような笑い話があった。或る夜更け(朝2時ごろ)、富美子は乾燥室で作業に邁進、私は氷点下の外のカーポートで、油落としの終わった毛皮50枚を、ドライクリーニングに使う溶剤で洗い、時

間がきて、ドラムを止め、中の毛皮を調べると、余りの寒さ(零下)のためか油の落ちが悪い。そこで、私はそばにあった、大型灯油ヒーターをいつもの様につけて、乾燥室に入った。カーポートには、にわか作りのタープの仕切りを作業のはじまる2ヶ月前から吊ってあった。時間が来たので、私は乾燥室から出て、ドラムの中の毛皮を調べることにした。眠くて、ボケた私の頭は、時間が遅れて、寝る時間がなくなる事を気遣い、大急ぎで、灯油ヒーターを消すのを忘れて、ドラムを開けてしまったのである。一瞬大音響がしてカーポート中が一面火の海になり、私は赤い火の中で、作業を続けた。音に驚いて、飛び出して来た富美子が私の焼けた髪の毛とまつ毛を気にし、私はそれでも、ドラムの中のコブ・グリットから出た部分のミンクの毛が焼けたことを悔やんでいた。

通常、オークション会社への出荷の最終受付日はオークションの1か月前となっていたのだが、無理を言って、特別、1週間前まで待って貰った。自分の3トントラック(バン)に注意深く乾燥したミンク毛皮を積み込んで、オルダーグローブのUSボーダーで保険を掛け、通関手続きをし、シアトルファークスチェンジ会社まで持って行き、その夜はダブルツリーインに泊まる予約を入れた。即座に、オークション会社のトップグレーダーのカートエスマンさんがその年、値段の良いと思われる我々のメスの毛皮。また、その年突然、我々の受け持ちに変わったというマークチュタロウさんと私が我々のオスの毛皮を受け持って、一緒に鑑定選別を始めた。



次の日の夜までかかってやっと、仕分けがすみ、バンドル(毛皮の束分け)が出来上がり、近くにいた若い鑑別見習いが、まだ次から次へと忙しく毛皮を振って埃をはらって頑張っている私に、気を使いながら、「ジミー、カートの背中を叩いて、良くやっとな、労をねぎらってやった方が良い!」と、私に耳打ちしに来た。近くに行くと、カートが自分の作品を誇らしげに、「ジミー、今年のトップはこれだ!」と、言って、出来の良さを分かってくれ!と言わんばかりだ。私はすかさず丁寧



に礼を言った。

これまで、毎年鑑別が終わると、鑑別結果表のコピーをセールス・レップ、ロンから貰って帰ったので、その年もそれを係のマークに要求すると、「今年からコンピューターを使うので、直ぐには鑑別結果表は渡せない」と言う返事だった。瞬間、出来上がった仕分けのコピーでいいのに、少し彼のバディー・ランゲージが意味ありげで、変な、理屈に合わない、言い訳だなと思ったが、仕方がないのでメスの分だけ、カートと2人でメモをした。すばらしいバンドル(毛皮の束)が出来たので、喜んで家で待っている家族の元へ3時間ほどかけて、飛ぶように帰った。

1週間後、朝早く起きてミンクの世話を済ませ、何時ものようにシアトルのサウスセンター・モールへと走った。朝の9時頃に着いて、まだオークション(1981年)の開始に間があった。混雑したフロントで飼育者用のカタログを受け取り、その年とりわけ多くの外国からの人混みを掻き分けて、オークション・ルームの横の通路をすり抜けた。急いで富美子とそのまま奥の倉庫へと向うと、途中、フロントから少し行った混雑した廊下で、前年、最高値で買ってくれた英国紳士ブロンベルグさんに会った。早速前年のお礼を言い、トップバンドル賞が何故だか2ドル安いバンドルに行ったことをお詫びしようとする、と、「ミスター・赤神、私はそんなことどうでも良い。何も気にしていない」と言いながら、少し憤慨気味な返事(バディーランゲージ)だった。

しかし、考えてみると、バイヤーのブロンベルグさんはそう言ったが、はたして、大金を叩いて世界一のデミバフ・ミンクを競り落としたミラノの毛皮屋さんはどう思っていただろうか？

間違いなく、不服を申し立て、自分の払った投資(世界1)に見合う補償を求めるのが常道だろうし、大切なお客の機嫌を損ないたくないのがオークション会社だろう。(数年後、元社長のゲアリーに依ると、「その毛皮屋さんは親父のマイクの代からの、世界で1、2の大切なお客さんだった」そうで、前の年、ピンク・ミンクのベストバンドルも私達の\$98.00ドルのデミバフ・ミンクのベストバンドルもシアトル・ファークスチェンジで彼が競り落とした)らしい。

兎に角、広い倉庫の中で、我々のバンドル(毛皮の束)がまとめて掛けてあるラック(掛け台)をやっとの思いで見つけて、急いでカートが自慢していたメスのトップバンドルを探したが、「そのバンドル」見つからない。フロントで受け取った飼育者用のカタログにも、その探している「より赤っぽいトップ・バンドル」の記載がない。慌てて、オークション・ルームの後

ろにある傍聴席へ行って、担当のセールス・レップのマークを探した

彼は私達が側に来ていることに気付きながら、アメリカン飼育者達との会話を続けて、なかなか我々の方を向いてくれない(バディーランゲージ)。すばやく、彼等の会話の切れ目に「探しているバンドルがない」と告げると、「心配するな、お前の出荷が遅かったので、誰かバイヤーが最後の下見をしているのだろう」と、はぐらかそうとして、逃げた(バディーランゲージ)。

「そもそも、我々の飼育者用のカタログ自体に、探しているバンドルの記載がない」とつげると、「今年、お前は、何枚出荷したのか。カタログに出ている枚数と出荷した枚数が合えば間違いなく、お前のペルトは全部カタログに乗っている」と無理矢理(バディーランゲージ)自分の正当性を主張しようとする。

出荷した毛皮枚数とカタログの中のバンドルの枚数の合計がピッタリと合致するが、私達の探している「肝心のより赤っぽいバンドル」がない。

私がカートと作ったメモに付いて触れると、変な目つき(バディーランゲージ)をして、何も返答出来ず急に、先程のアメリカン・飼育者達(中にルーフもいた)の方を見て、彼等と話し出して、我々を無視(バディーランゲージ)した。彼の周りにはいるアメリカン飼育者の振り返った目つきも排他的で、皆が彼の側の味方で取り付く暇もない(バディーランゲージ)ようである。

腹が立つのを押さえて落ち着こうと思い、その場に突っ立って、上の空で、丁度、始まりかけたオークションに1瞬目をむけるが、富美子が横で、「どうしよう!」と言い、私に『何かしろ!』とバカリ目で催促する。私は、英語で怒鳴って、暴れることぐらいは、お手のものだが、しかし、これまで全力で築き上げてきたミンクビジネスを全て棒に振りがたい。突然、その傍聴室に例のトップグレーダーのカートがドアを開けて、入って来た。その時、私達とカートとの距離は20フィートはあった。しかし私を見つけるや、アメリカン・飼育者達、勿論、マークにも聞こえるように「ジミー。ワイフにあのバンドルを見せたか?」と大声で嬉しそうに聞いて来た。

「幾ら探しても見つからない。飼育者用のカタログにも「あの色合いのバンドル」が載っていない」と当惑して、静かに言うと、カートは笑って、「俺が見せてあげるから、俺に付いて来い!」と自信たっぷりに言った。私達はホッとして倉庫までカートについて行った。



一緒に数分間探したが、とうとうカートも「そのバンドル」を捜し出せず、カートが諦めて、「社長室へ行こう」と私達を導いた。社長室には、社長が不在で、カートが社長の机の上真ん中に置いてある、大きな元台帳（マスターカタログ）を開いて、私達の箇所を探した。

私達が探しているバンドルは、元台帳の中程のアカガミミンクランチ会社のページの初めにあった。そのバンドルの「色合い」の詳細も、毛皮の数も、サイズも、全てわれわれのメモと記憶に適合した。しかし、その上に鉛筆で、大きく「Xと販売済み」と書かれてあった。

探している問題のバンドルは、元台帳（オークション会社のマスター・カタログ）だけに存在して、オークションの始まる前にすでに売られていた。

そして、我々飼育者用（我々のカタログ）には別のバンドルが用意され、肝心のバンドルは存在しなかったことになる。つまり、カートの誇るバンドルはオークション前に（オークション会社に盗まれて）、陰で売られ、残りの彼の苦作のバンドルもバラバラにされて組み替えられた可能性が出て来た。カートは、むっとした様子（ハディーランゲージ）で、「調べる」と言って、社長室から飛び出していった。カートの返事を待ちに待ったが、それきりでオークションが終わってしまった。

（2008年1月31日私の自分史を出版する前に、BCの毛皮集荷を受け持つチャットウィンの手配で、当時副社長になっていたカートに合いにアメリカン・レジェントへ行ったら、カートには会えず、2月2日ゲアリーに会った翌日にアメリカン・レジェント会社の集荷場で会い、カートは「当時の事は忘れた!」と言った。

2008年2月1日にゲアリーを訪ねて、わたしのメモア（自分史）の原稿を見せた時、彼に寄ると、1973年、既に、シアトル・ファー・イクス・チェンジ会社はアメリカンレジェントミンク飼育者組合のものへと移行していたそうで、1980年に我々がトップ・バンドル賞を貰えなかったのは、「ハドソン・ベイ・オークション会社とミンク飼育組合がしたこと、シアトル・ファー・イクスチェンジ会社は口をはさめなかった。」と言った。1981年の「オークションの前に我々のトップバンドルがこっそりオークションの前に売られたことは全く知らなかった!」と述べた。

別れる前に「自分が会社を辞める時、その当時のマスター・カタログを自分の家に持ち帰っているの、詳しく調べて、どうなったかを知らせる。」ことになったが、彼は土地の大知名人だが4年後になっても、まだその知らせが来ない。）

しかし、その年、1981年、オークションの始まる前に弁護士のカート・ハース氏がCEOと成ったことが発表され、「ベスト・バンドル」抜きで我々の毛皮がやはりその年のシアトルのオークション会社で売れたデミバフ・ミンクのトップとなり、やはり英国のバイヤー・ブロンベルグさんがミラノの前年と同じ毛皮商のために競り落とした。ブロンベルグさんとそのミラノの毛皮商には、そのオークションの前にも後にも、その年の我々のベスト・バンドルを見るチャンスがなかった筈だ。もしあのオークションの前に隠されて売られた私達のベスト・バンドルが正にオークションされれば、多分また米国内になったと思うし、業界は又、大揺れに揺れたであろうし、我々の毛皮の値段の平均値も上がっただろう。

（ひょっとして、ブロンベルグさんもミラノの毛皮屋さんも既に承知の上のことだったかも知れない。）

いまだに思うのだが、誰が勝手に我々の大切なトップバンドルを隠して、すり替え、オークションの前に、我々に相談なく、誰に売った（処分した）のだろうか。問題の我々のバンドルをオークションの前に買った人があるならば、彼は間違いなくミラノの例の毛皮屋さん売りに行ったであろう。ミラノの毛皮屋さんはそれで満足したのだろうか？

あるアメリカンの飼育者が、矢張り、今年もトップだったねと、意味ありげに、同情げに、近付いて来た。不正を知っている人が多くいる。

『いわゆる専門家と云う者は、その専門知識を使って、一般のお客の助けをするのが本道で、その専門知識を使い、自分のお客を征服しようと思った時点で、その人は専門家ではなく、詐欺師に替わるようである。』

「16歳になったので、自動車の免許を取りたい」と良譲が言い出した。一瞬どきどきしたが、「取っても良いが、一生無事故でいるには、自分がしっかりしていることは勿論だが、ダム（よほど）ラッキーでなければならんぞ!」と忠告した。私は良譲の用心深さには疑問がなかった。しかし、こちらがどんなにしっかりしていても、でたらめな奴のいる世の中だ。「何時も危険率を考え、選択の余地があるなら、危険率の少ない所を危険率の少ないように走れ」と馬鹿な忠告をしたように覚えている。しかし、私自身はいつも時間がかかっても安全を取ることになっている。

もう2つ余計なエピソードを言ったのを覚えている。「百科事典のセールスマンになった時、大阪支店のセールスマンは自動車を持っていなかった。先輩も支店長の会社の車、コロナに乗って、支店長と一緒に出張に行くのが常で、我々新人は電車や地下鉄、バスを乗り継いでセールス活動を続けた。たまた



ま、アポイントメントに間に合わない時にはタクシーを使うこともあった。セールスが上達して、車を買うことが出来そうになった時、初めて免許を取りに行くことになり、毎日、色々車の情報が会社に流れ出した。しかし、人間はそれぞれ1人1人違うもので、最初に1人の先輩と私より年を取った1人の同期の者が少し贅沢な日産スカイライン1500と云うのを買ってしまった。2人ともセールスの成績は余り良くなく、月賦を払うのに四苦八苦していた。

私は2人の月賦を助ける意味で、幾度か販売旅行と一緒に行ったのを覚えている。その都度、彼等の運転でガソリンや出張経費を私が払い、最後にコントラクトを3つ程、彼等にあげたのを覚えている。

私は少し遅れて、マツダファミリアと言う1000ccの大衆車を買ひ、どんどん売り上げを上げた。良譲を妊娠中の富美子と北海道までファミリア1000ccで行き、1ヶ月半掛けてすばらしい成績をあげた。人によっては、セールスの助けになる筈の車が重荷になる人がある。車をしょっちゅう洗い、なぜ回したりして、車につきやす時間が多くなり、一旦走り出すと、セールスを忘れて、又は駐車場を探して、次の街、次の街へとどんどん走ってしまうようだ。車がセールスにプラスになると、それが足を引っ張ることになる人がある。常に、プライオリティー(優先事項)を忘れてはいけない」



(マツダ ファミリア)

「もう一つ、あるセールスマンが、ある日家族を連れて、海辺にピクニックに行った。彼が車から離れている内に、奥さんが運転の練習を始め、小さな子供に後ろを見させて、車をバックさせた。子供が、OK、OK言っているのに、奥さんがバックする内に、くるまが、小さな土手をすり落ちた。それにパニックになった奥さんは車を完全に海の中へバックさせてしまった。後部座席には乳飲み子がいたそうだ。彼等は幸い周りにいた人が海に飛び込んで全員無事で、車は家まで牽引されたが、車の修理の金がなく、彼は自分でそのクルマを細かく分解して、塩水を洗い落としたそうだ。勿論、百科事典はそのため半分売れなかった。」

良譲は免許を取ると、次は、「車が欲しい」と言い出し、「みんな車を買ひ出したし、ほくも高校で成績が一番だから、車を持っても良いだろう」と理屈詰め、要求してきた。私はこの時とばかり、「たかがこの高校位で1番だからとか、数学のテストでカナダの10%に入ったからとか言って、安心してはいけない。環境が違って、もっと頑張れば1%以内に入れるはずだ。車もよく考えれば、今すぐ必要ではないかも知れない。

日本で言う“井の中の蛙、大海を知らず”とは、その様な思いあがり、戒めることわざで、車を買う前に、先ずは、もっと良く出来る学生の沢山いる学校を捜して見ようじゃないか」と提案した。

親しいミンク農家のアイヴィンに「この辺で、良い私立高校がないか」と聞くと、「ジョージに聞いた方が良い」と言う。CBC放送のアナウンサーのジョージ・ウィルソンさんに、「この辺りでもっと勉強の出来る子のいる、いい学校がありませんか?」と聞いてみると「ヴァンクーヴァー市にセント・ジョージと言う学校があるが、ヴィクトリア市にセント・マイケルス・ユニヴァーシティ・スクールというカナダで1、2の学校がある」と教えてくれた。

早速、富美子と3人でセント・マイケルス・ユニヴァーシティ学校を訪れて、事情を話すと、校長のシャフターさんが喜んで、編入テストを良譲の高校の校長に直ぐ送ってくれることになった。

話を聞いた、良譲の担当の先生は、良譲に、「君がセント・マイケルス・ユニヴァーシティ・スクールに行けるとは思はない」と言ったそうだ。しかし、試験の結果、直ぐに、良譲はグレード12(12年生)からセント・マイケルス・ユニヴァーシティ・スクールに行くことが決まった。

良譲を連れてフェリーに乗り、入校前に制服を買うためセント・マイケルス・ユニヴァーシティ学校へ行って、たった1年間だからと、中古の制服を買うことにした。本人は、少し不服のようだが、我慢して買った。

中古の制服をボランティアで売っていた、全員白人の奥さん達の1人が冷やかな横目でこちらを伺い、こちらに聞こえるように、こそこそと良譲のことを耳打ちし合って「グレード12からでは一遅いの」と言っているのが嫌みのように聞こえて来た。ともあれ良譲は寮生活を始めて、金曜日の授業が終わると、バスに乗って、ヴィクトリアからシドニーのフェリー乗り場まで来て、2時間程フェリーに乗り、真つすぐ帰って来てくれた。忙しくて、何時もぎりぎりの時間をやりくりをして、汚い作業服のままだったが、毎金曜日、トワッセ



ン・フェリーの船着き場まで息子を迎えに行くのが、楽しみになった。

家では仕事を猛烈に手伝って貰った。我々は土地のローンと食費位しか給料を取らないので、ミンクの値段の悪い年などは、時間給にすると 1ドル75 セント位にしかならない時があったようだ。我々は日本に帰らない時は、1年に 1人 6千時間ずつは働いていた。時々、ミンクの餌になるスクラップ・フィッシュを料理したこともある。良譲と淳子の方が政府が決めた最低賃金なので我々より比べ物にならない程、何倍も良いようだった。

1年も経たない新車で、錆びて屋根に穴の空いた赤いフォード・サンダーバードは良譲にやることにした。

まだ良譲がセント・マイクルス・ユニバーシティ・スクールに行き始めて間がない時、金曜日の授業を終え、ヴィクトリアからシドニーのフェリー船着き場までバスに乗り、フェリーに乗り、トワッセン船着き場から降りて来て、車に飛び込むやいなや、私にはっきりと、「お父さん、微分積分が少し問題だ。」と持ちかけて来た。

私はフリーウェイ 99 を南へ、高速で走り出しながら、半ば、その質問の真の意味を斟酌しながら、「微分積分のどこが分からないのか？ 微分積分は面白いだろう。微分積分は、私の好きな科目の 1 つだった」と、やり返した。良く聞き直して見ると、良譲の話していることはまだ微分積分の初期入門程度であった。

私と子供たちはいつも英語で会話していた。子供たちが、英語を家庭で喋っている他所の子供に、出来るだけ引けを取らない様に、語彙が少なくなならないように、私は英語を使い続けた。子供に単語の綴りを聞かれても、親として、自信を持って直せる必要があった。



子供と英語で言い争いになって、子供が富美子に日本語をしゃべらなくなった時でも、私は、子供のチャレンジを受けて立って、英語で口論に勝ち、英語で子供を説得して、理論的に優位に立たねばならなかった。

子供が習い始めて、興味を持った高等数学を、親爺が分かるかどうか試そうとしたのだと思う。私は微分積分を 20 年程前に日本語で習った。しかし英語で子供と会話することになん

ら不自由を感じなかった。不思議 と、カナダで10 年程ミンク農場をしている内に、頭の中に英語の微分積分がいつの間にか存在していたようだ。

私は、その事実の発見に、1 人でほくそ笑み、良譲は、まだ同じ次元で 親爺と興奮出来ることを楽しんでいただろう。私の、「オイ、それはまだ入門だ。入門の駆け出しのうちから分からなくて一体どうするんだい。もし、形の輪郭を関数 $f(x)$ の数式で表すことが出来さえすれば、 $y = \int f(x) dx$ を使 っ て、面積を考え始めると、おもしろくて、ゆっくり飯も食っていらなくなるぞ!」と言うのを聞いて、良譲は、「うん」と後部座席で、うれしそうに体を振って答えた。

しばらく2人とも声を出さずに、お互いの思いに耽っていた。良譲は、「まずい、親爺は知っている」と感じたのだろうし、私は逆に良譲が、喜んでうん!と同意したので、「こいつは、良く分かっているくせに!」と、ひと安心した。良譲は、それ以来、微分積分は一度も持ち出さなかった。

1975 年に作った、うちのミンク場へのドライブウェイが、インテグラルの形をしていることを、このとき良譲に再認識してもらった。良譲はその時初めて、「そう言えば、そうだ!」とそのことに初めて、気が付いたようだった。ドライブウェイを作った時、良譲は小学校 4 年生だった(実際には 3 年生の年令)。

次の数年間、我々はシアトル・オークションに失望したため、出荷せず、カナダのハドソン・ペイオークション会社に出荷した。

「SATテストを受けさせて欲しい」と良譲が言い出した。「アメリカの学力テストで、もし、結果が良い点数だと、大学の 1 年生をスキップして、大学に 2 学年から行けることになっている」そうだ。私は、「それ程良いテストなら、受けたいだけ受けて見ろ」と、指示した。

良譲はことごとく良い成績だったようで、調子に乗って、ある日、突然、「ハーバードへ行きたい」と、言い出した。「面接員が、ハーバードからセント・マイクルス校に来る」そうだ。面接員が、わざわざセント・マイクルス校に来るからには、これは本物だなと、思った。「ハーバードにお前が行けるなら、何としてでも、例え田地畑叩き売ってでも行かせてやる!」と約束した。自分は親が早く死んでいないために、行きたい大学へ行けなかったからだ。(1985 年全飼育数 13714 頭、9514 枚出荷)

やはりセント・マイクルス校に行かせて良かったと思 った。地元の高校には、ハーバードから面接員が来ないだろうと



思った。毎日、気遣いのようにいそがしく働きながら、次の週末が来るのが待ち遠しかった。

フェリーから下りて来た良譲に寄ると、「面接員から『日本人なら日本から受ける』と言われた」と言う。『日本にもわざわざそのために面接員が行く。私は、ここへカナダ人の応募者のために来ているのだ。』と言われた」と言った。

私が、「お前は移民の子で、大学受験はカナダ人と同じの筈だ」と言うと、良譲は「そう言ったが、先方は首を横に振ったままで、面接も受けさせてくれなかった」と、言った。

その年、セント・マイクルス・ユニヴァーシティ・スクールから、中国系の男子が一人スタンフォードへ行き、白人の女の子が1人、ハーバードへ行ったらしい。良譲は落胆して、かわいそうだが、私は彼の人生を左右する大問題に何もしてあげられず、ただ頭を抱えるだけだった。

結局、ある日、シアトルのユニヴァーシティ・オブ・ワシントンと良譲と3人で訪ねてみたが、学資や経費を考え、色々話し合い、ハーバードに行けないなら、カナダのBC大学に行くことに落ち着いた。アメリカの大学なら2学年から行けるのに、BC大学はカナダの大学でアメリカのSATテストの結果を認めないため、良譲は1年から行かねばならなかった。少し不満のようだった。



(ブリティッシュ・コロンビア大学)

私の勝手な憶測だが、おそらく、ハーバードの面接員は、形式的に來ただけで、素手に白人の女子の合格者はずっと以前に、内定していたのだろう。

我々は、日頃とんでもない程忙しかったが、週末には、殆ど毎週のように疲れ切った体を引きずって、ヴァンクーヴァー市にあるBC大学の寄宿舎にいる良譲を訪ね、その頃ブロードウェイ通りにあった、日本レストランの亀井寿司に行くのが定番だった。

最初はBC大学を車で出て、「大阪屋」と言うのをブロードウェイ通りの南側に見付けて、その名前に釣られて喜んで入って見た。出て来るみそ汁が生ぬるく、かまぼこが煮すぎて黒くなっていた。てんぷらが固く、古い油の匂いがして、とうとう出て来たさしみが気持ち悪い。どうも日本人の

作ったものではないように思えて来た。若いアジア人の女性の給仕の着物の前がハの字にはだけ、だらしなくて、様子がどうも変で閉口した。

ブロードウェイの亀井すしでも2度ほど閉口したことがある。所有者が日本人からアジア人になった時のこと、わざわざ前もってお金を払って予約して、楽しみに待っていたおせち料理を、12月31日の夕方に、オルダグローヴから1時間程かけてわざわざ取りに行くと、注文してあったおせち料理を人に売ってしまい、クロツとして、『もうありません』と言われた。売った当人や責任者が現れず、謝る気配すらなかった。おかげでその年の我が家の正月におせち料理が全くなく、ずいぶん日本が遠くになってしまった感じがした。

或る時、同じレストランで給仕をするアジア人の女性が卓上コンロのコンロ用プロパン・ボンベの交換に手こづっているの、私が手伝おうと手をさしのべた。驚いたことに、その女性は殺虫剤のスプレー缶をコンロに入れようとしていたことに気付いた。我々4人は驚きの余り直ぐ立ち上がり、その場を引き上げて、以来、新しく出来た近くのタマすしへ行くことにした。

食事を終え、良譲を何時もの様に大学の寄宿舎へ送り届け、99号線で家路に着くと、日頃の疲れと満腹感と適度の振動で眠れなくなった。フリーウェイ 99号線を出て16th アベニューを少し東へ行った所で、たまらなくなって路肩に止まり5分位寝ようとする、後ろから来た白人の男の車が寄って来て、「お前、飲んでるだろう?」と、しつこく窓越しに詰め寄って来た。「いや、仕事が多すぎて、寝る時間が少なくて、唯、疲れが出て眠りたいだけ!」と、言ってもなかなか信じて貰えなかった。私は1滴もアルコールを飲まないの、この様な時助かった。

(1986 年全飼育頭数 13104 頭)

1987 年春には、マンハッタンのハドソンバイオクション会社に 8397 枚出荷した。しかし、勿論、そのオークション社も、アメリカのミンク飼育組合の影響下だった。ミンク場で忙しく準備に追われている私を気使って、淳子が予めニューヨークのホテルを予約して呉れることになったが、ニューヨークのタクシーには以前、悪い記憶があったので、空港からホテルまでのタクシー代を予め聞いて置くように指示して置いた。

オークションの前日、富美子と2人でラガーディア空港から、そのオークション会社の近くのエンバシー・スイート・ホテルへタクシーで行くことにしていた。



空港の表で順番が来て、黒人の女性配車係に促されて古いタクシーに乗ると、カリブ辺りからと思われる黒人の運転手が、賃走をせず走り出した。私がそれに気付いて、「メーターを使え!」と言うと、分かりにくい英語で、「この方が、お客さんのためだ!」と、うそぶいた。それでも、私が後部座席でわざわざ音を立てて、座り直して、伸び上がって、大声を出して、「賃走しろ」と怒鳴ったので、運転手が首をちじめて、「動かずに静かにしてくれないと、直ぐポリスに見つかって、賃走していないのがばれると困る!」と、言った。勝手にしやがれと思ったが、余り事を荒立てても、と思い直して、仕方がないので、そのまま彼の言う通りに大人しくしていた。

ホテルに着くと、入り口の前に、ポリスカーが1台停まっており、ロビーに白人のポリスが2人いるのが見えた。運転手は、その方へ目をやりながら、「45ドルだ」と、慌て気味に、タバコでうすよごれた後ろ手を出した。私は、予め、淳子から、25ドルだと聞いていたので、「25ドルだ!」と言って、25ドルだけを払った。腹がたっていたので、胸を張って、チップも払わずにホテルに入った。数日後、ホテルから空港までのシャトル・バスが1人25ドルだと分かり、あの哀れなタクシー運転手に悪いことしたと、ちょっと後悔した。

全く、驚いたことに、ハドソンバイ・オークション社のロビーに入るや否や、私達の来るのを待ち構えていた、シアトル・イクスチェンジ会社の前の社長オーナー、ゲアリーと、その会社を首に成った、前のBC担当の白人セールスレ

プ、ロンに出くわした。ゲアリーが親切そうに私達をロビーから、毛皮の展示倉庫へと導きながら言うには、

「君達の毛皮とユナイテッド農場の毛皮の鑑別を助けるために、2人共、臨時でここで働いている」そうだった。彼等の方が「ほんのりと赤いティント(色合い)」のワイルド・タイプのデミハフ・ミンクの鑑別は、そのハドソンバイ・オークション会社の鑑別士より馴れていることは明白であった。シアトル・イクスチェンジ(オークション)会社の社長の時、我々には雲の上のような人だった忙しい彼が、その時は1介の東洋人飼育者に妙に親切に(バディー・ランゲージ)近づいてきた。意表を突かれて、その時は、先の年の出来事には触れず、それとなく付き合う他、手がないように思えた。

ゲアリーを何とか1時撒いて、「出荷したミンクをこのオークションで売らずに、引き上げることが出来るかどうか?」をオークション会社のカナダBC担当のセールスマン、ボブ・グレーさんを探して打診した。彼は「別に問題はない」と言ってくれたが、一旦、出荷して、彼等に鑑別させておいて、オークションの準備をさせた後、売らずに毛皮を引き上げるのが、不条理と思った。しかたなく、そのままなりゆきを見てみることにした。

ゲアリーは、広大な毛皮の展示倉庫へ入るなり、既に、比較するべき我々の毛皮の束のナンバーも空で熟知しているようで、私達のミンクとユナイテッド農場のミンクのバンドルを一部ずつ集めて来て、比較しながら(バディー・ランゲージ)手際よく馴れた手付きで色々尤もらしく、親切に説明してくれた。

しかし、どうも、その年オークション初日が終わる頃には、ミンクの値段が全く振るわない様相を呈して来た。我々の主力のデミハフミンクの番はまだ来ていなかったが、ブルー系統のミンク毛皮のオークションのハンマーがなかなか落ちず、どのランチもほとんどの毛皮がどんどん買い戻されて、全く、気が滅入った。

2日目の昼過ぎだったと思うが、低評のため飼育者達が失望して、次から次へと帰り始めた。建物の中ががらんと始めて、オークションのスピーカーだけが無闇に響きわたる。オークション会社の広い便所の入り口を入った所で、1人ポーンとして小便をしはじめた。すると、ニューヨークの顔見知りの白人バイヤーが一人、急がしようにバタバタやって来て、私の隣の便器で小便をしはじめた。一息ついて、隣で用を足している私に気付き、大声で「ジミー、俺、お前のミンク買ったぞ!俺、お前のミンク買ったぞ!」と嬉しそうに体を大きく振った。



彼の放尿が便器から外れて、横を向いてそれを見ている私の足にかかるのではと慌てる程、天にも登るような喜びようだった。彼がもう 1 息付いて、お互いに便器に向かい直ってから、私が「どんなミンクを買ったのですか？」と聞くと、「モ、モイル・ハフ(ミンク)だ。数分前、突然ハンマーが鳴っただろう」と、彼はまだ感情の高ぶりが収まらない。おお、今さっきの幾つかのハンマーの音は私のミンクが売れた音か！と嬉しく思うかたわら、反射的に『ちょっと可笑的い』と思った。

通常、モイル・ハフ・ミンクは異種交配するもので、余程良い物は別として、色が薄すぎて中途半端で、大体は、染めたりする安物だ。モイル・ハフ・ミンクを買って、それ程、喜びのが実に可笑的い。我々はそれ程重要に思っていなかったもので、まだ下見に行っていなかった。1 度、見に行こうと思い、傍聴室で他の白人ランチャーと共にキャタログに鉛筆で記録を取っていた富美子を誘って、2 人で毛皮の展示倉庫へ行って、我々の売れた 5 束程のモイル・ハフ・ミンクを探した。

現物を見て、全く驚いた。ショックが全身を駆け抜けた。1 瞬の内に、視覚神経に血流が欠乏し始め、周りの事象がスローモーションに見え、他人事のように感じた。それは、モイル・ハフ・ミンクではなかった。我々の誇るワイルド・タイプの「ほんのりと赤い色合いのデミハフ・ミンク」であった！シアトルファイブクスチェンジで北米でトップ（世界 1）を取った我々の最良バンドルのシェイド(色合い)がまとめて、5 束程だった。

ゲアリーやロンがわざわざシアトルから鑑別に来ていて、間違える筈がない。実際、ゲアリーがワイルドタイプの・デミハフ・カテゴリーの命名者または命名責任者の 1 人であったと思われる。我々はゲアリーを直ぐに探した。彼は、私達のモイル・ハフと呼ばれた最良ミンクを見るなり、何も言わずにユナイテッド農場の最良バンドルを探し出し、比較し始めて、初めて見たように当座をごまかすようで当惑気味のように、考えがまとまらず（パディー・ランゲージ）、しばらく何も言わなくなった。

完



10. 事務局からのお知らせ

関西支部 「森本先生特別講演会開催」のお知らせ

新春特別講演会 「2025年の国際情勢と日米同盟の将来」

- ・講師 元防衛大臣 森本敏先生
- ・日時 2025年1月21日(火)
- ・開場 14:00 開演 14:30 終了 16:00
- ・会場 豊中市立文化芸術センター大ホール
- ・受講料 1,999円
- ・協賛 豊陵会 主催 NPO法人リタイアメント情報センター



大阪府立豊中高校第12期生
防衛大学校卒業。航空自衛官をへ
て外務省入省後、在米日本国大使
館一等書記官、情報調査局安全保
障政策室長など一貫して安全保障
の実務を担当。
2000年より拓殖大学所属。同大学
の総長を歴任し、2022年同大学の
名誉教授称号授与。
2021年から同大学の顧問を務める
(現職)。
これまでに初代防衛大臣補佐官、
防衛大臣(民間人初)、防衛大臣政
策参与を歴任。

発行：特定非営利活動法人 リタイアメント情報センター (R&I)

〒100-0011 東京都千代田区内幸町 2-2-3 日比谷国際ビル 18 階

ウィップシステム(株) 内

●TEL 03-5860-9483 FAX 03-5860-9477

●事務局 E-mail : toyoguchi.k@gmail.com

●HP : <http://retire-info.org/>

(発行責任者) 事務局 豊口一美